

2

芝草の基礎知識

2-1 生育形の違い—『ほふく型』と『株型』

芝草には、横に伸びるほふく茎という茎を持つ『ほふく型』と、ほふく茎がない『株型』があります。

1 ほふく型

- 『ほふく型』は、ほふく茎により横に広がることができ、部分的に消失したとしても、適切な管理を行えば回復させることができます。



一部が消失しても、再度、横に伸びることができます。

2 株型

- 『株型』は、消失してしまった場合、種まき、あるいは補植しない限り、その部分の回復はありません。



消失したところは再生しません。

ポット苗補植 (P25 参照)

『ほふく型』の中でも特に生長力が旺盛なパミューダグラスの『ポット苗』を補植して、裸地部を回復させる取組が、多くの学校で行われています (写真は一定間隔で植えた『ポット苗』が広がるのを待っているところ)。

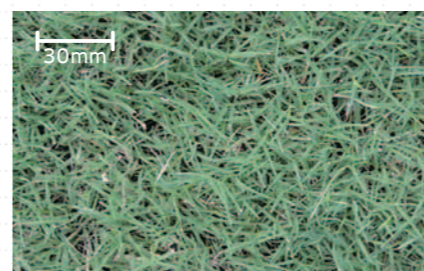


2-2 生育時期の違い—『夏芝』と『冬芝』

1 夏芝 (暖地型芝草)

- 主に4月から10月にかけて緑色を保ちます。
- それ以外の季節では地上部が茶色くなり、根や茎の形で休眠します。
- 平均気温12℃が新芽生長/休眠の目安です。入学式が終わった頃に新芽が出てきます。
- 平均気温が25℃以上になると最も旺盛に生長します。夏休み期間が最もよく伸びます。夏休みをうまく使って傷んだ芝を回復させましょう。

夏芝の主な種類



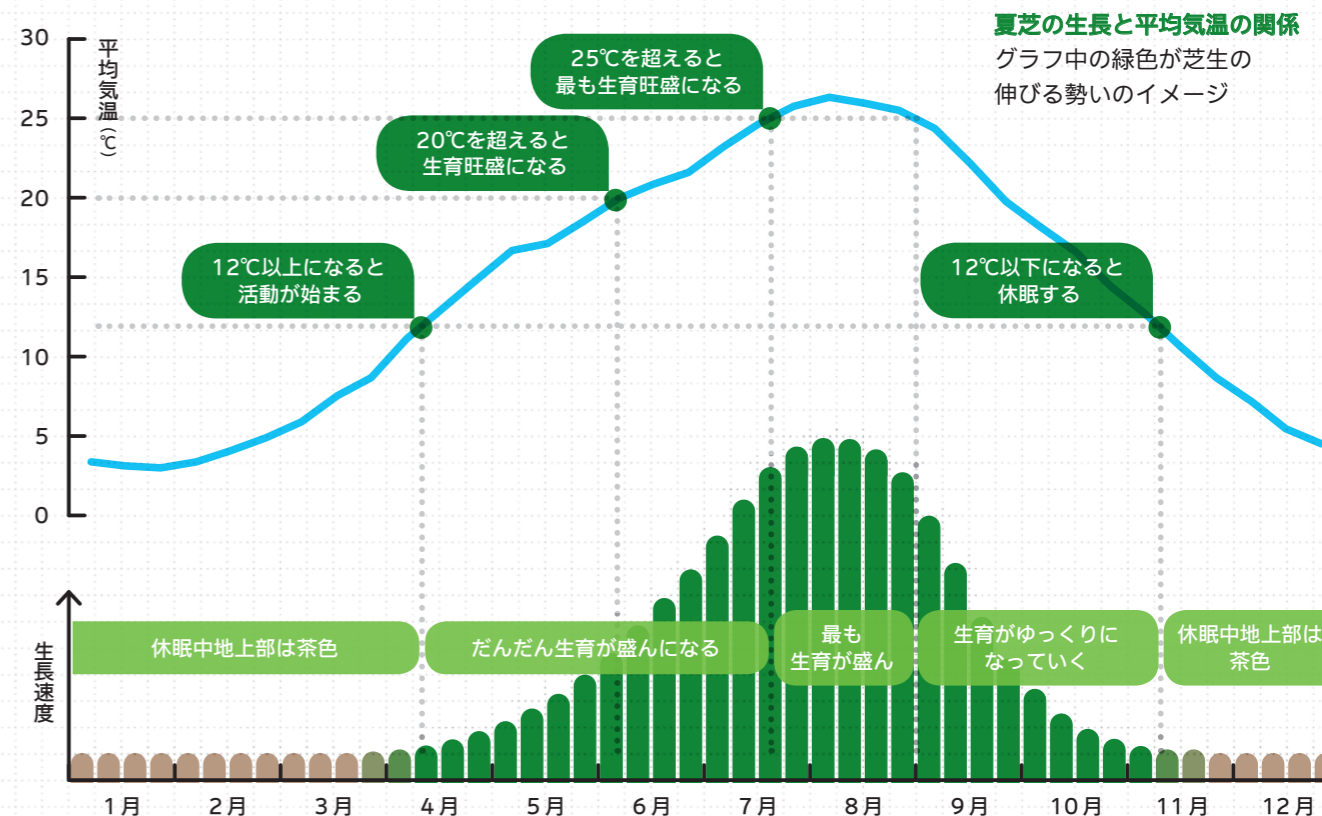
パミューダグラス ほふく型。生長力は強。ティフトン419という品種が最も有名。芝生をよく使う学校や幼稚園向き。



ノシバ ほふく型。生長力は中程度。通常よりも生長力が改良された品種があります。生長が穏やかなので、芝刈りの回数を減らせるメリットがあります。



コウライシバ ほふく型。生長力は中～弱程度。通常よりも生長力などが改良された品種があります。葉が小さく、きめ細かい芝生になります。



2 冬芝 (寒地型芝草)

- 主に10月から7月にかけて、冬の間も緑色を保ちます。
- 夏(平均気温25℃以上)になると枯れ始めます。このため、毎年秋に種まきし、育てます。
- 種が発芽するには平均気温で15℃以上が必要です。最適な種まきの時期は、9月下旬から10月上旬にかけてです。
- 平均気温が10℃以下になると生長がほぼ止まります。寒さが強くなると一時的に退色します。

冬芝の主な種類



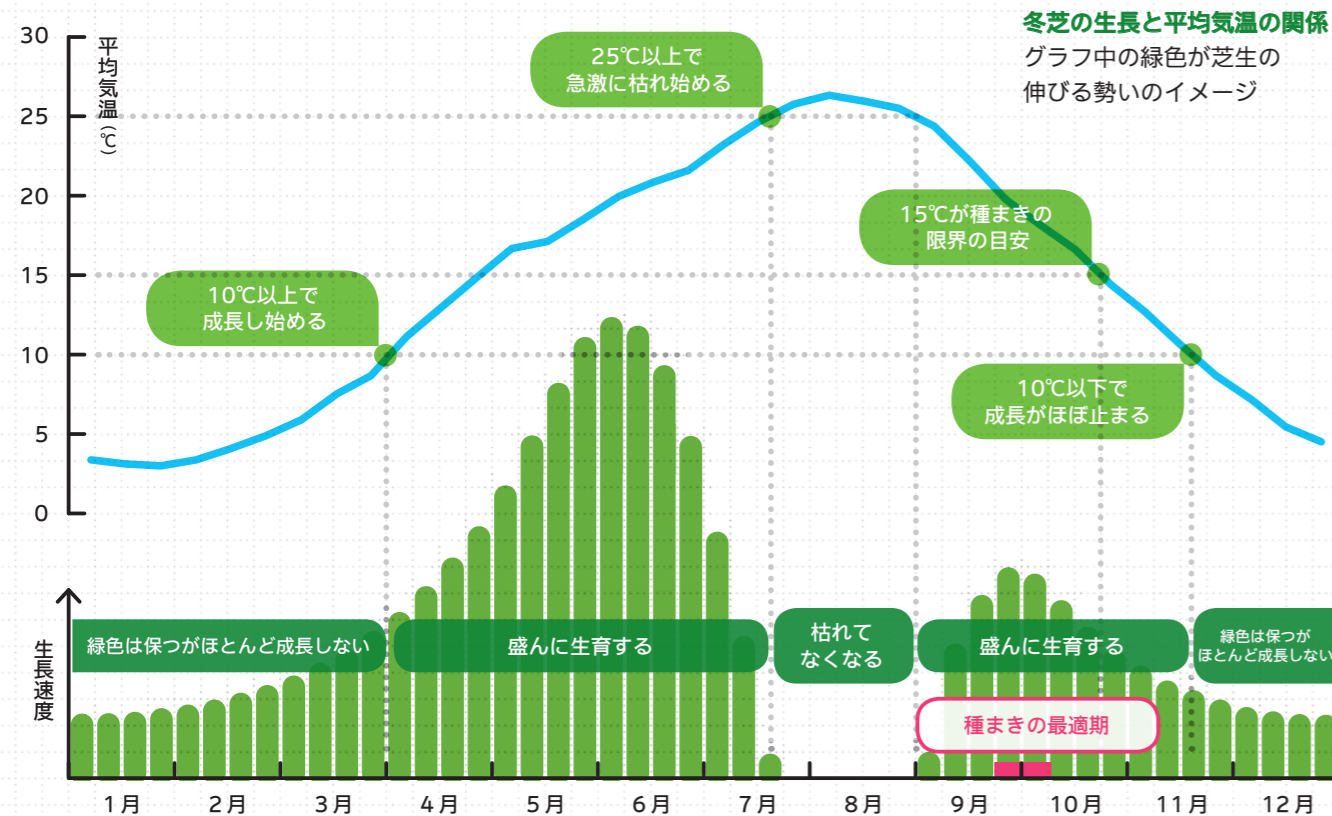
ペレニアルライグラス 株型。初期生長が比較早いので、養生期間が短く、校庭や園庭で最もよく使われています。



インターミディエイトライグラス 株型。冬芝から夏芝への切替えがしやすい特徴があります。



ケンタッキーブルーグラス 弱いほふく型。初期生長が遅い。寒さに強い特徴があります。



2-3 一年中緑の芝生にするには (ウィンター・オーバー・シーディング)

1 ウィンター・オーバー・シーディング (WOS) とは

- 東京の気候条件では、夏芝、冬芝のどちらか一つだけで一年中緑の芝生にはできません。そこで、夏芝と冬芝の二つを組み合わせ、一年中緑の芝生を保つ方法があります。
- 具体的には、夏芝の上に冬芝の種子をまき、育てることで、一年中緑の芝生を保ちます。この技術は、ウィンター・オーバー・シーディング (Winter Over Seeding : WOS) と呼ばれています。
- WOS は、都内の学校や幼稚園で、既に数多く実施されています。

2 WOSのポイント

- WOSを行うことで、一年中緑を保つことができるので、特に運動会を春に実施する学校では、冬芝の緑の上で運動会を開催することができます。
- 冬芝の種まきから、使える芝生に上がるまで、養生が必要です。養生期間は、種まきの時期や使い方によっても異なりますが、2週間から1か月程度が必要です。
- 冬芝が最も生長するのは、4月から6月にかけてですが、この時、夏芝も新芽を出してくる時期に当たります。
- そのため、4月から6月にかけて冬芝の旺盛な生長を芝刈りによって抑え、地面に日光が当たるようにすることで、夏芝の新芽を出やすくします。これを怠ると、夏芝の生育に影響し、夏季に裸地が多くなる可能性があります。

